

破壞 戰線

十三死團篇

いつの頃からだろうか。

歩くだけで額に汗を浮かべるような季節になっても、セミの声がそれほど耳につかなくなったのは？ 多くの人はその事、気にも留めていないのかもしれない。違和感を感じていた人間も、いつしか日常という慣れに、薄気味悪さを埋没させていく。

車線の一つを、車が明け渡している。日に焼けたアスファルトの向こうから、微かな声が木霊し、近づいてくる。規制するはずの笛は、むしろその声を先導しているかのようだ。ここにもまた、“慣れ合い”といこの国の日常が見える。

「増税、反対」

「庶民の暮らしを、守れ」

笛の音が、それらの叫びの終わりに吹かれるのが滑稽だ。この国で唯一残る、国家に向けて行われる抗議の意思表示。それは悲しいまでに、予定調和の行為となっていた。

不意に予定調和のシュプレヒコールが、止まった。行進の列も、歩みを止めた。先導する笛が、鳴り止んだ。あまりにも平和な日常にいた人間がその落雷のような音に、皆足を止めた。そして、振り向く事を恐れるように、凍りついた。けれどもいくばくかの好奇心が、恐る恐るその爆音が放たれた方を振り向かせた。

「親分、違いますぜ。あれは経産省のビル。今日のデモは、財務省に対してですぜ」

「ああ？ どっちも似たようなモンだろ」

「ほら一応、許可を取っているデモの趣旨に合わせないと」

「ウルセエ野郎だ、三下。じゃあそっちにも撃ち込んでやるよ」

そう言う男は担いだバズーカ砲の角度を、少しズラした。

誰もが呆気にとられ、その様子を見守った。デモを先導していた警察官まで口を半開きにして傍観しているのだから、世話が無い。

「ほらよ、いくぜ！」

男の肩口のバズーカ砲から、火が噴いた。眼前には、噴煙が上がるビル。すぐさまその隣のビルの一角も、無残に崩れていく。

「親分。ちょっと、当たりが浅かったですぜ」

「馬鹿野郎。これぐらいがちょうどいいんだよ」

バズーカ砲を放った男は、飄々と言い放った。

「よし三下。出しやがれ」

「はいよ」

ジープの運転席にいた小柄な男は、いきなりハンドルを大きく切った。ジープはそのバズーカ

砲の男を乗せたまま、勢い良く走り出した。

そこでようやく警官隊が、呪縛を解かれたかのように駆け出した。爆発音が静まる代わりに、パトカーのサイレン音が響いてきた。

バズーカの男はその方向目がけて、体を入れ替えた。もちろん、バズーカの砲口も一緒だ。

「馬鹿者！ 何を止まってるんだ」

パトカーが急ブレーキで止まると、車の中ではこんな怒鳴り声が響いた。

「だって、あいつバズーカ撃つつもりですよ」

「撃つって……」

怒鳴った助手席の上官も、口を噤んだ。躊躇なく霞が関の官庁に向かいバズーカをブツ放つような連中だ。パトカーに向かっても、軽く引き金を引くだろう。

ただ治安を守る猛者達が気圧されたのも、無理は無い。正しくはロケットランチャーと呼ぶべきであろうロケット砲は、一般的には直径六センチから九センチほどの代物だ。けれども男が担いでいるものは、その倍を遥かに超えている。それを外国人の大男ならともかく、平均的な日本人の背丈ほどの、どちらかと言うと華奢に見える男が一人で軽々と扱っているのだ。

「ほら、しっかりと運転せんかい……」

上官の怒鳴り声も、自ずと気弱になる。

そしてジープは、小さくなって、消えて行った。警官たち。居合わせて通行人。騒ぎに気づいて駆けつけてきた野次馬たち。

皆の耳に、ようやく収まった爆発音の代わりに、不敵なバズーカ男の高笑いが残った。

暗殺されたはずの男

「この間の霞が関の事件」

「あのバズーカ砲をぶっ放したっていう？」

「そうだ。あれは、虎門狂二だ」

「虎門で・・・あの男は三年前に、死んだはずじゃ」

話を聞いていた毎界新聞の記者は、思わず息をのんだ。誰もが忌まわしい記憶として思い出す男の名を口にした朝生新聞の記者は、自らを落ち着かせるようにタバコをくわえた。

「ああ、確かにあの連続武装デモの時、政府はそう発表したよ。けどな、俺は信じられなかった」

ライバル紙とはいえ、その実は横並び意識の強いマスコミの世界だ。こんな情報交換は、日常の光景に過ぎない。朝生の記者は続ける。

「だってそうだろう？ ぬるい日本政府なんかが鎮圧に動いたって、あの獣のような男を殺すなんてできっこない」

「けどさ、虎門グループなんて言ったってたかが二、三十人の若造達だろう？ 機動隊なんかが本気でいけば、殺れるだろう」

朝生記者は首を大きく横に振った。

「違うな。機動隊なんて言っただ、所詮は日本人だ。人を、ましてや同じ日本人を殺すなんて芸当、できっこない」

「まあ、暗殺したなんてまるで外国での出来事みたいだったけどね」

いくらか若い毎界新聞記者も、首をひねる。そこで先輩風をふかすように、朝生記者が持論を展開し始めた。

「俺はな、裏取引があったんだと思う」

「裏取引ですか？」

「ああ。外国に逃がす代わりに、もう大人しくしてくれってね」

「その方が日本らしいやり方って言えば、そうですね」

毎界の記者は苦笑いする。

「そこでしばらく外国に行っていたが、再び日本に戻って来た」

朝生記者はそれが正解であるかのように、得意気だ。

「でも、一体どうして？」

「そこまでは知らんよ。まあ、日本政府を強請る気じゃないか？」

朝生記者は自説に水をさされたような気がしたのか、唇を歪めて適当な返事をした。

さてこの予想は正しいのかそうではないのか？ まさにその頃、都内某所でその回答となるべき会合が開かれていた。日本の一流新聞の記者たちも知らない会合とは、一体どのようなものな

のか？

十三死団-1

豆園悟、という名には不釣り合いなガッチリした背格好の男だ。時の内閣の官房副長官という気負いもあるのだろう。胸を突き出すようにして、熱弁をふるっている。

「霞が関で経済産業省と財務省に向けて砲弾を放ったのは、あのテロリスト、虎門狂二に間違いはない」

豆園官房副長官はカ一杯テーブルを叩いてみせた。それは純粹な怒りというより、多分にパフォーマンスめいた仕草に映る。

「そこで、我が日本国において殺人の権利が与えられた十三人。君たちに集まってもらった訳だ」

豆園は声を上ずらせて、再びテーブルを叩いた。

「なのに何故、たったの二人しか来ていないんだ！」

十三人に召集をかけ、集まったのはわずか二人。恐らく自分が侮辱されたと感じたからだろう。今度はテーブルよ裂けよとばかりにカ一杯、感情をぶつけるように叫んでみせた。

けれども居並ぶ男達は気にする様子も無い。ひよろりと痩せた男は癖なのか顎をしゃくる仕草を止めようともしない。そしてもう一人の大男の方とは言えば、居眠りでもしてるように目を閉じたままだ。

「まあそういきり立つなよ。だいたい虎門ていうのは三年前に政府が暗殺したんじゃないのか？」

大男はどうやら、話はきちんと聞いていたらしい。

「私もそう聞いていたよ」

豆園は唇を噛んだ。

「そう申し送りを受けてきていた。しかし・・・違ってたんだ」

「政党が変わって、騙されたんじゃないかねえのか」

痩せた方の男が陰気な笑みを浮かべた・

「かもしれんな」

豆園はそう吐き捨てた。

「だからあの時に、俺に任せれば良かったんだ」

大男の巨大な顔が、醜く歪んだ。

今となってはなぜそうしておいてくれなかったのだと、豆園は思う。この殺人者たちを動かすには、億単位の金が必要だと聞いている。虎門クラスになれば少なく見積もっても十億は下らない。けれども現代日本の最大の脅威を取り除くのに、高い金額だとは言えないだろう。

「まあいい。今度は・・・」

大男の言葉を、何かの機械音が遮った。

「へりだ」

壁側に座っていた痩せた方の男が、いち早く窓の外のへりに気づいた。

「ここが地上四十階の高層階だからと言って、ビルの傍を飛ぶなんて、危なっかしい」

豆園が吐き捨てる。

「マンハッタンみたいに、ヘリがドカン、って突っ込んできたりしてな」

大男が立ち上がって、窓を覗き込む。摩天楼、とはほど遠い殺風景な日本の都市が広がり、確かにビルの傍を一機にのヘリが飛んでいた。人によっては、あのニューヨークの自爆テロを想起するだろう。けれどもヘリはそれ以上近づこうとはせず、先端もビルには向けていなかった。しかし代わりに縄梯子を垂らし、豆粒大の何かが縄梯子に勢いをつけ、まるでツタを持ったターザンのように窓に向かって飛んできた。

それは、人だった。けれども部屋にいる誰もが、それが何者なのか把握できなかつたに違いない。無理も無い。地上百メートル以上を越すビルの窓にヘリから縄梯子一本で向かって来るに人間など、存在するはずがない。あまりに予想外の事で、皆呆気にとられるしかない。

けれども冷静に判断すれば、たつた今自分たちが議論をしていたターゲットが向こうからやって来てくれたのだ。十三死団の殺し屋たちはチャンスとばかりに動くべきだった。

縄梯子の男が、荒っぽく窓に足をかけた。強化ガラスか何かなのだろう。それだけでは罅ひとつ入らない。

ガラス越しに男の唇が動くのを、最も間近で見ている十三死団の大男は確かに認識できたはずだ。けれどもその言葉が「よう」であったか「あばよ」であったか？ それは高層ビルの厚いガラス窓に遮られ、耳までは届いて来ない。大男は窓に近づき、縄梯子の男の顔をまじまじと覗きこんだ。

窓の外にいる男、つまり虎門狂二の肩口には、トレードマークとも言える巨大なバズーカ砲がしっかりと携えられていた。そして偶然であろうかそれとも窓に着いた瞬間に照準を合わせたのか。その砲弾は大男の顔面にしっかりと、狙いを定められていた。ビルの中からみればまるで大男の方が、バズーカの砲口を覗き込むように顔を近づけているようにも見える。

(グ、アツ・・・)

それは危険を察知した人間の本能か。大男が呻きのようなものを発し後ずさろうとした瞬間、窓の外の虎門の指が小さく動いた。引き金が、引かれたのだ。大男の巨軀がのけぞった時、顔面は一瞬にして後形も無くなった。無数のガラス片が、大の字に倒れこんだ首無し男の巨体を彩った。

「虎門狂二！」

豆園が気がふれたように叫んだ。粉々に破られた窓の外で、笑い声が響いた。さながらそれは、空を舞う悪魔のようにも思えた。

百メートル以上もある空中を縄梯子に片手一本で掴まった虎門狂二の、不敵な姿だった。既に虎門の体は窓から離れ、ヘリからの縄梯子一本にぶら下がり、宙を漂っている。

「オイ何をしている。撃て」

豆園の言葉の先にあつたのは、さっきの会議の間中、不遜にアゴをしゃくりあげていた細身の男の姿だった。今はただオロオロして、見る影もない。

「おい。貴様は銃の使い手なんだろう？ 宙づりの虎門は、絶好の的だ」

意外にも状況判断ができてるのは、豆園の方だった。いくら近頃は（無能の集団）と揶揄される政治家といっても、それなりに胆は据わっているのかもしれない。

オロオロしていた男の方もその恫喝にようやく我に返ったらしく、懐から銃を取り出し、構えた。ヘリから縄梯子一本でつながっている虎門は、確かに格好の的と言える。

「撃て、撃て、撃て」

豆園が絶叫した。早くこの修羅場を抜け出したいのか。

けれども、放たれたのは銃の弾ではなかつた。銃そのものが、宙に舞った。いやそれには銃以

外のものも付いていた。引き金にへばりついた指、手首。男の手首から先が銃と一緒に宙を舞い、床に転がった。

「ギャーツ」

男が悲鳴を上げた。腕から血しぶきが舞い、壊れた蛇口のように大量の血が流れ落ちている。さしもの豆園も、言葉が出ない。ただその瞳には、血に染まった日本刀を持った男の姿が確かに映っていた。

日本刀を持った男は、哀れ片手を失い悲鳴を上げる男の横に、ピッタリと立っていた。

そしてその男は、まるで怪しく輝くその刀を軽く振り、血を払い始めた。

「ウツ、ウウウツ・・・」

片腕を失った男は呻き、その場にへたり込んだ。いや正しくは、立つ事が困難になったに違いない。刀の男は、まるで肉の筋を切るように、今度は両の足の腱を切ったのだ。

「俺は、不知火」

刀の男が名乗ったのは、自らが切り刻んだ血まみれの男に対してか、それとも豆園にか。切られた訳ではない豆園は、壁に背中をつけ、立ったままの姿勢を維持するのにやっとだ。

「狂二さんは、政府の十三死団の召集を喜んでいるぜ」

刀の男の声は、くぐもった聞き取りづらいものだったが、豆園が今最大の懸案となっている相手の名を聞き逃すはずが無かった。

「貴様、虎門の手下か」

豆園が叫んだ。

「そうだ」

不知火は涼しい顔で頷く。依然として手にした刀をペンのように扱いながら、崩れて膝立ちになった男の顔を今度は無造作に切り刻んでいる。

「おい。やめろ」

さすがに豆園も十三死団の殺し屋の苦痛を案じたか、必死の形相で叫んだ。

けれども不知火はと言えば、どこ吹く風。今度は男の体に刀を突き立てていく。並の人間であればもうとっくに息絶えていたかもしれない。けれどもなまじっか殺し屋という家業の性か。生命力は常人よりいくらか強いらしい。

「不知火。一体おまえたちの、虎門の目的は何だ」

豆園はもう、腰から半分崩れ落ち、姿勢を保ってはいない。不知火は手を止める事なく、答えた。

「もちろん、この国をより良くするための活動さ」

嘘だ。みんなが知っている。虎門狂二はデモ活動にかこつけ、ただ破壊と暴力を楽しむ殺戮者である事を・・・。

不知火がそう答えたのはしかし、偽善を取り繕うためでも無いに違いない。豆園の質問など、どうでも良いのだ。恐らくは目の間で息耐えようとしている男をなぶり殺す事。それだけが今の興味で、他者の質問などどういう答えでも構わないのだ。

その証拠に、不知火は突然興味を無くしたかのように、ドアへ向かって歩き出した。

「-----」

豆園が何かを叫ぼうとしたが、もう言葉にはならなかった。不知火が部屋を出るとほぼ同時に、切り刻まれた十三死団の殺し屋の体は、前のめりになって崩れ落ちた。不知火は男が息絶えたのを感じ、既にこの部屋から関心が離れてしまったのだ。

もう一つの復活

都会のオフィス街の夜は、静けさが支配する死者の街となる。ビルの合間合間の路地などは顕著で、闇だけがある。街灯などが明々と点いている時期もあったが、エネルギー問題などあって、最近は点灯されてないものの方が多い。

「ああ、わかっている。任せておけ」

闇の中で男は、手にした携帯電話へ向かい自信満々の口ぶりだった。

「虎門狂二だろうが何だろうが、十日もあれば仕留めてみせるさ」

男は携帯をきり、闇の中から出ようとした。

「不用心だな。こんな町の真ん中で、仕事の話をするなんて」

不意に投げかけられた声の主に対して、男は振り返った。月明かりは巨大なビルに遮られ地上までは届かず、男の顔はハッキリしない。ただ薄紫色のジャケットだけが、かろうじて確認できるのみだ。

「お前こそ。女がこんな時間にこんな場所に一人でいるなんて、襲ってくださいって言うようなもんだぜ」

男もこの暗闇では相手の顔までは識別できなかったはずだ。それでも女だと判じたのは、その声からだろう。

「おまえ、十三死団の山崎だろう？」

女は少しも動じる事は無かった。

「俺の事を知ってるという事は、タダの女じゃないな。虎門の仲間か？」

けれども男は、身構える素振りでは無い。元もとの性格か、それとも相手が女であるから油断しているのか。

「あんな奴の仲間になんか、するなよ」

女の舌打ちが、聞こえたような気がした。けれどもそれはどうやら、別の音だったようだ。男の体が、手品にかけられたようにいきなり持ち上がっていった。断末魔が暗闇に響き、ビルの間を木霊した。女の舌打ちのような音は、ピアノ線か何かを弾く音だったのか？

男は暗闇に持ち上げられ、呻き続けた。やがて明りのない街灯に吊り下げられた干物のように、グツタリとして何も言わなくなった。

「やはり、大した事ないな」

暗闇の中に女のため息と、立ち去っていく足音が響いた。十三死団のひとり、山崎という殺し屋は屍になる前に悟ったか？

(瑞希鏡花も、現れたか---)

と。